



「いにしへの流され人もかくありて」

北原白秋

北原白秋は、明治・大正・昭和にわたり多彩な活動を続けた詩人、歌人、童謡作家。昭和十年の五月に、三菱重工長崎造船所から所歌制作の依頼を受けて来崎した際、伊王島に俊寛僧都しゅんかんそうずの墓をたずねた。

平家打倒の陰謀に加わった罪で配流された俊寛の境遇に心を打たれた白秋は、伊王島と題して長歌一首と反歌を詠んだ。

反歌

いにしへの流され人もかくありて

すゑいきどほり海を睨みき

この長歌と反歌は、白秋主宰の歌誌「多磨」における白秋の最後の発表作品の一つとなった。

歌碑は、昭和二十五年、長崎地方裁判所長や伊王島村長の発起で、俊寛僧都の墓に並んで建立された。